

結納01

最近では結納にも簡略化を求める傾向が強まっていますが、大切に育てられた女性を迎えるための結納には、様々な手順・作法、そして歴史があります。

◆結納とは？

そもそも2つの家が姻戚関係を結ぶにあたり、花嫁となる女性の両親に今日まで育てあげられたねぎらいの意味を込めて協同で飲食する酒肴が事の始まり。縁をしっかりと結びあわせる“結いもの”や娘さんを妻にと申し込む“言いいれ”妻とたのみ嫁とたのみ“頼み”とも呼ばれていました。また、結納の“結”には田植えなどの際に労力を提供し、助け合う「ゆひ」の意味からもきています。助けあう互助精神で家と家とのつながりが深くなるということでしょう。つまり、結納は両家をつなぐための正式なプロポーズ。この酒や肴が次第に花嫁衣裳などの反物に変わり、現在では小袖料や帯料などの金銭が中心となったのです。

◆結納はいつから始まったのでしょうか？

日本では日本書紀の仁徳天皇31年の皇太子が女黒媛を妃に迎えた際に結納が納められた様子が「信幣之物(しんぺいのもの)」という記事で出ています。しかし、この結納、元は中国伝来の風俗で1年に1度、村中の人が集まり好きな人と歌を歌ったり、踊ったりしてプロポーズするという集まりから来ているようです。

◆赤から緑の色替は中京地方独特

小袖料、帯料を受けた結納にたいして嫁方から婿方へ袴料を届けることを中京地方では色替と呼んでいます。色替とはめでたい紅白の包み紙で届けられた結納を、一歩引いた松葉色に包みなおして袴料を届ける儀式のことで、これは名古屋を中心とする中京地方独特のもので、(寿留女は勝男に替えます)その歴史はまだ浅く、昭和20年以降の戦後物資が非常に不足し、食べるのに事欠いていた時代にあみだされました。本来は結納取り交わしの当日に行われます。ですが、この色替えはあくまでも中京地方の儀式なので関東、関西の方からいただいた結納の色替して届けると驚かれます。

◆きらびやかだけでない、意義ある結納品

熨斗(のし)

出陣や凱旋の時の祝いの魚としてアワビが使用されていたことからよそ様に品物をおくる時、のしをつけるという礼法が足利時代の武家に定められていました。その名残といえます。

友白髪(ともしらがり)

夫婦共に白髪になるまで幸せな人生がおくれますようにと、強く協力的な性格を有する麻が対で結ばれています。

末広(すえひろ)

どうぞ純白な気持ちで当方に来てください、また扇のように幸せが広がりますようにという願いより一對の白扇が入っています。一對という数には共に末長く幸せにという意味が含まれています。

子生婦(こんぶ)

祝い事には欠かせないもので嫁にきていただいたら、立派な子供を産んでほしいと子孫繁栄を願う気持ちがこめられています。漢字は雅語(がご)を使用し子生婦(こんぶ)と書きます。また、養子の時は幸運夫(こんぶ)となります。

勝男節(かつおぶし)

慶事に用いられ武家全盛の頃は出陣とき“勝男武士”と名づけられてこれを贈り、武運を祈りました。

寿留女(するめ)

寿にはおめでたく、しかも長生きで幸せでありますように、留には一生こちらに嫁としてとどまってもらうように、女には良い妻であるようにと、3つの意味があります。漢字には雅語(がご)を使用し寿留女(するめ)と書きます。

結納Q&A

Q. 結納飾りの処置はどうすれば良いのでしょうか？

A. 昔は、二世誕生の時、感謝の気持ちを込めて産湯をわかす薪がわりに使われました。ですが今は、お世話になった氏神様に焼納してもらうのが良い方法とされています。また、1月15日に行われる「左義長(どんど)」を利用するのも1つの手でしょう。